

博士論文 (要約)

The Book as Project: Architecture and Education at the Intersection of Theory, Practice, and Urbanism.

(ブック・アズ・プロジェクト：理論、実務、アーバニズムをつなげる建築と教育に関する研究)

モーセン モスタファヴィ
Mohsen Mostafavi

第1章：イントロダクション

本論文は、二十年以上にわたって行われた個々の研究プロジェクトを二つの概念にまとめ、それらの関係性を提示するものである。一つ目の概念は、学術的な建築に関する本を作成することは、建築を設計し施工する際の、観念性、デザイン性、具体性を伴った様々な試行錯誤と類似したプロセスであることを示す。二つ目は、現代の建築教育の役割について、建築理論のあり方、建築家としての実務、都市を考察するアーバニズムの観点からまとめる。本論文の全体的な議論は、これらの2つの概念が交差する地点においてこそ現代の建築と建築教育は成り立つということを示すものである。

本論文のタイトル「ブック・アズ・プロジェクト」は、建築書の内容と意図、およびその作成過程が解釈される方法の観点から、建築書の従来の規範的な概念を再定義するという目的を意図している。ここで使われている「プロジェクト」という言葉は、アイデアを概念的に追求する意図とともに、その実装の計画または戦略についても示すものである。つまり、ここで言う「プロジェクト」とは、積極的に将来像を描き、可能性を追求するものであるという意味合いを持っている。

この章では、主要な議論として、海外の大学機関等で展開されている現代の建築教育のさまざまな手法やスタイルが、建築理論と実践の関係性をどのように位置付けているかを概説する。それらの建築教育のコアが、デザインスタジオ、歴史と理論、技術、メディアとリプレゼンテーションの四つであり、これらの関係性について説明する。

またここでは、筆者自身の編著による多数の著作から厳選され、本論で言及されている一連の七冊の書籍が、具体的な参考事例や様々な思考モデルを提供することを通じて、建築理論、実践、アーバニズムの相互関係をどのように探求しているかについても示すとともに、これらの研究分野間の関係が特に建築教育の不可欠な部分を形成していることを主張する。このような図式の中で、「建築理論」は「実践」の概念に深く絡み合い、さらに「実践」の概念は「アーバニズム」に関連する行動の基盤を見出す。これら七冊の著作は、個々に特定の文脈の観点からまとめられていると同時に、他の研究分野との密接な関係で理解することも可能なものである。

本論文をまとめるにあたっての方法論とそれを位置付ける資料は、単なる論文作成に必要であるのではなく、従来の設計教育の代替になり得る基礎を提供することを狙いとしているものであり、理論的かつ思弁的でありながら、現実的かつ具体的なものである。他の数多くの研究プロジェクトとは対照的に、これら特定の書籍の選択は、将来のデザイン教育において教育の方法論や研究手法の可能性を位置付けるために意図的に考案されたものである。した

がって、二十年以上にわたって行われた個々の研究プロジェクトの集積としてのこれらの本の一貫性が、論文の議論の重要な部分を形成している。

第2章：理論

この章では、上で述べた書籍の内の2冊を用いて、建築理論に関連する研究と理念を議論している。選択した本は、『On Weathering: The Life of Buildings in Time (ウェザリング：時の経過にともなう建物の生命)』（『時間のなか建築』黒石いずみ訳、鹿島出版会、1998年として、邦訳が刊行されている）と『Surface Architecture (表層建築)』である。ここでの目的は、理論的な観点から、学問領域であり構築物（想像され、制作され、経験されるもの）でもある建築に深く関わっている思考、考察、執筆の様式について実証することである。

この章ではまず、建築における時間と一過性の概念について説明する。その後、建築と時間が交差する地点において対立する考え方への対処について、「エッセイ」によって提供される具体的な特徴と性質について論じる。

建築は、歴史的にも、より最近の建物や実践的構築物の事例を通して、議論される。産業と大量生産のあり方と関係の議論によって、研究は現代における現実的な生産条件に結び付けられる。この章の第二部では、建物を覆う建築的要素である「cladding (被覆)」と、視覚性と外観の問題について考察を行なっている。これによって、建築における「理論」の役割が、建築的な時間の概念とともに、テクノロジーと美学を通して探求されている。

第3章：実務

第3章は、現代の実務の状況に焦点が当てられている。これは、建築の実務に直接携わる建築家とエンジニアである二名による事例を詳細に分析することを通じて行われた。一人目はスイスの建築家であるペーター・メルクリ (Peter Märkli) であり、二人目はスイスの構造エンジニアであるユルグ・コンツェット (Jürg Conzett) である。選択された書籍は、それぞれ、『Approximations (近似)』と『Structure as Space (空間としての構造)』である。

この章では、これらの実務家の建築作品や仕事を通じて、建築と施工の相互関係、近似の概念、現代建築における前例の役割など、さまざまな重要な議題について考察している。またその他に、工学、建築、ランドスケープ、インフラの間関係性についても考察を行なった。ここで得られた思考は、現代建築を論じるにあたって大きな影響力を発揮するものであると

考える。この章では、これらの論説を通して、より広い社会的、政治的、空間的文脈の中で建築を位置づけている。

第4章：アーバニズム

この章では、極度に都市化するプロセスにおいて避けられない、無秩序で、しばしば容認できない結果を生み出している現状、または、世界中の貴重な資源の継続的な枯渇などの問題意識を元に、創造性や技術的可能性を発揮して将来を形作り得るプロセスについて考察する。これらの議論は、主に以下の3冊の書籍—『Ecological Urbanism (エコロジカル・アーバニズム)』、『In the Life of Cities (都市の生活)』、『Ethics of the Urban: the city and the spaces of the political (都市の倫理：都市と政治空間)』—を参照して展開した。

本章の主題的存在であるエコロジカル・アーバニズムの概念を考察するにあたり、ランドスケープとアーバニズム (ランドスケープ・アーバニズム)の相互関係を考察している。エコロジカル・アーバニズムとは、限られた資源の中で、様々な生産的つながりを通じて、都市に住む人々の利益になり得る美しさや空間的豊かさを与える建設環境のあり方を考察する試みと見なされている。この章では、従来の建築における主流であるビジュアル的なコミュニケーションに加えて、都市を語るナレーションや説明といった方法論的な提案、さらには、空間的公正性や敵対的アーバニズムのような社会的および政治的枠組みについても考察された。

第5章：結論

結論の章では、ここまでの章で示した研究とアイデアを振り返りながら、建築の教育と実務に対するオルタナティブなアプローチを探求している。建築教育は、実務の現場を変えることだけを目的とするのではなく、教育機関の内側での実践や習慣に疑問を投げかけることも目的としている。

結論の章では、七つの書籍で述べられている概念に基づいて、建築設計のデザイン教育と教育学のための重要なツールとして、本論文で示した知的、空間的、都市的なモデルの重要性を明確化している。それは、大学などの教育機関を思弁的思考に不可欠な場所として成り立たせ、理論的、実務的、そして地理的に建築を位置づけることを可能にする。このようなアプローチは、今日必要とされている「世界性 (worldliness)」、または統合されたグローバルな思考形態を構築するための重要な要素であると論じている。最終的に、本論文は、建築の

領域において高度な学際的知識が必要であることと共に、専門領域の横断的な連携が不可欠であることを示している。